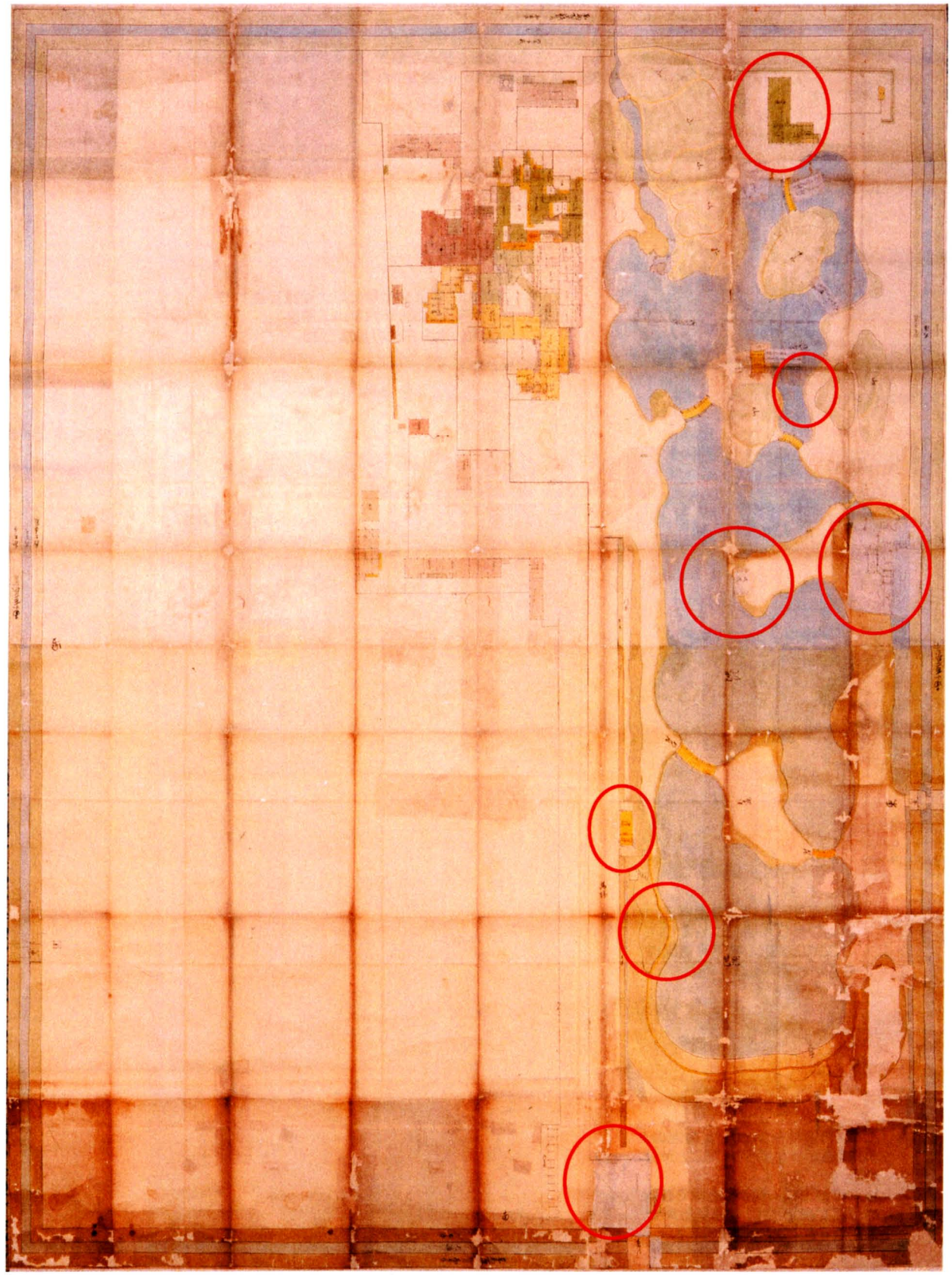
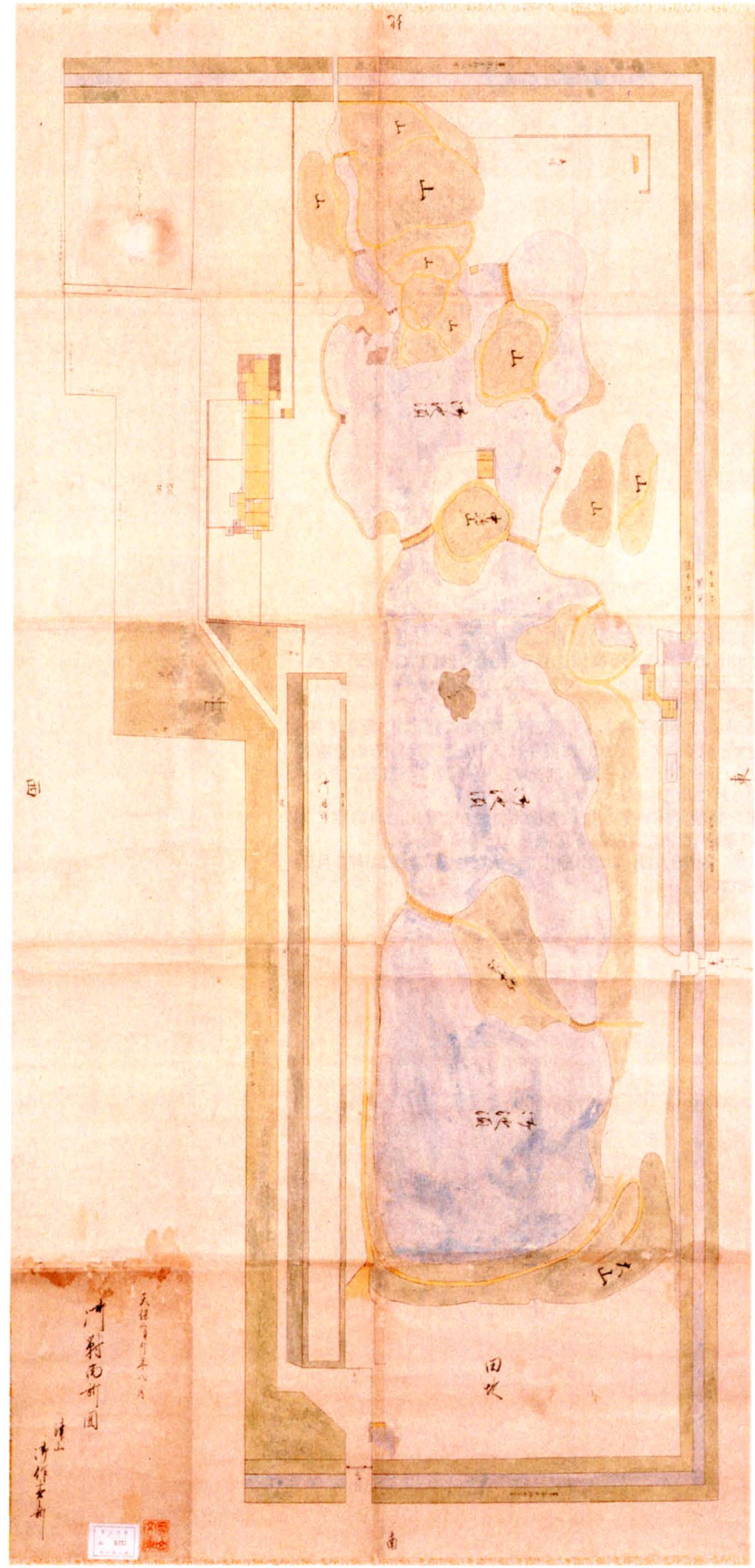
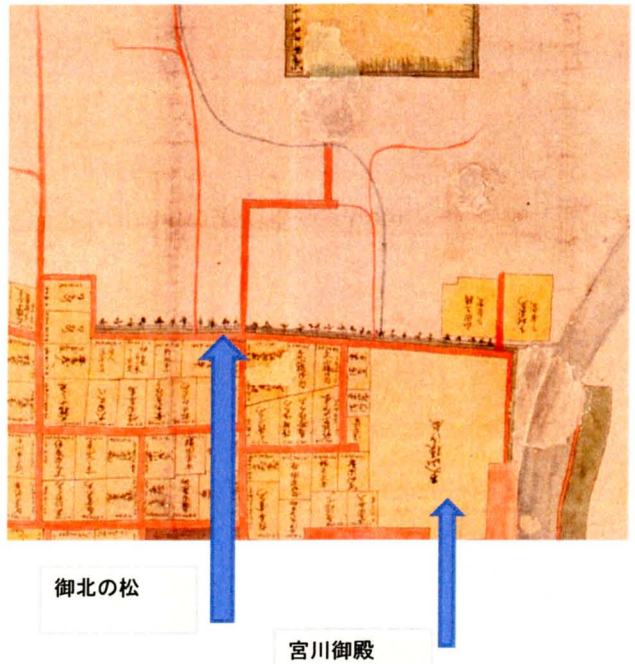


年不詳、御対面所絵図

松平藩時代初期の敷地は、東西百四十二間（約256m）、南北百六十二間（約292m）で、ほぼ正方形に近い形状をしていた。これは、森藩時代も同様であったと思われる。



天保2年（1831）御対面所図

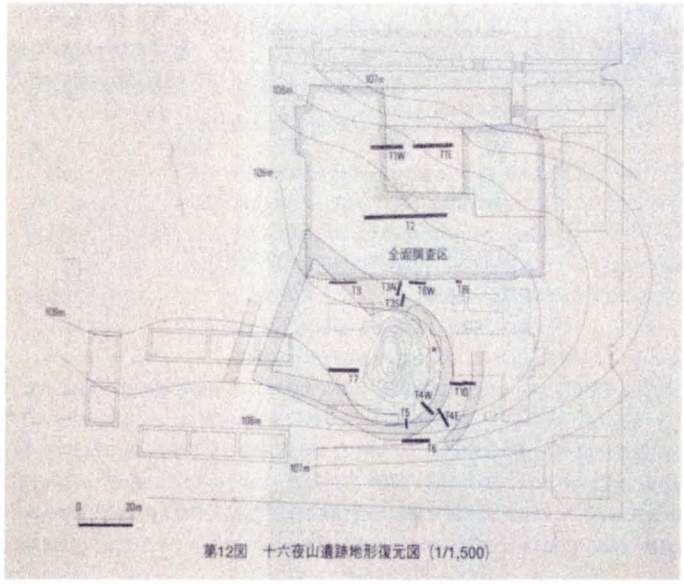


光長の子綱賢は、延宝2年（1674）正月に四十二歳で亡くなる。そこで、光長は二代藩主忠直の孫にあたる綱国を養子とした。綱国は次期藩主として養子に入ったが、天和元年（1681）6月、世に言う越後騒動に列座して、備後福山に流されてしまう。

元禄元年（1688）には綱国も許されて、江戸柳原邸に帰るが、家督を相続することはできず、元禄6年（1693）に養子に入った宣富が、その後家督を相続した。そして、元禄11年（1698）になって、美作国に十万石を得る。綱国は、同年の11月に津山に入っている。

津山にやって来た綱国が本格的な屋敷を構えたのが、宮川沿いの字二本松付近の地で、森藩時代には関家の下屋敷だった場所である。

綱国は、宝永5年（1708）8月には出家して更山と号し、享保20年3月5日、七十四歳で死亡した。



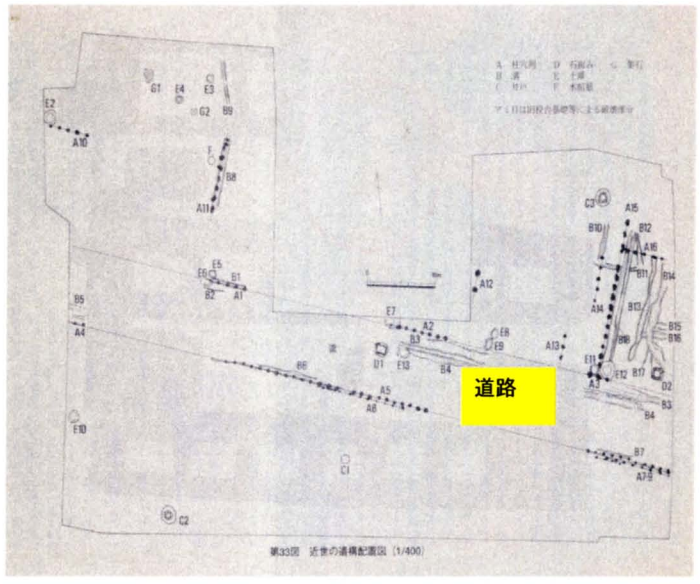
第12図　十六夜山遺跡地形復元図（1/1,500）

十六夜山古墳

多数出土している円筒埴輪などから、5世紀末頃の築造と考えられる。古墳の復元を試みた結果、墳長約60m、後円部径約40m、前方部幅約45mと推定される。

参考資料

『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書130
十六夜山古墳・十六夜山遺跡』
『年報　津山弥生の里第6号』

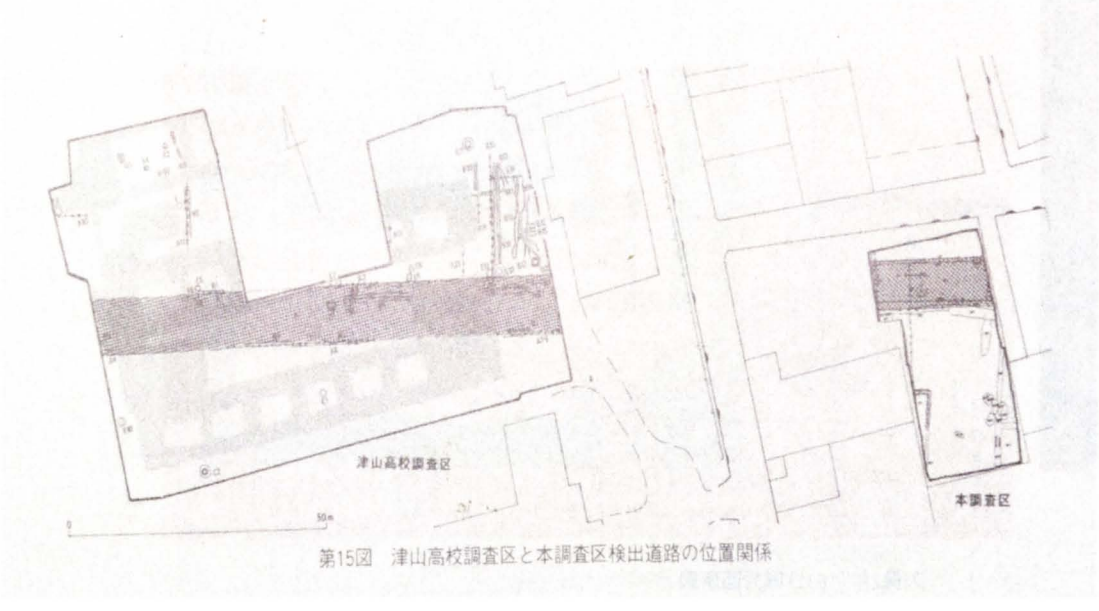


第33図　近世の遺構配置図（1/400）

津山高校敷地内部の遺構。道路の形状が明確に見えている。この道路は、城下町絵図にも描かれている。

第3図　遺構全体図（S＝1：160）

津山高校百周年記念館敷地の遺構。北部分に道路がある。絵図には描かれていない。



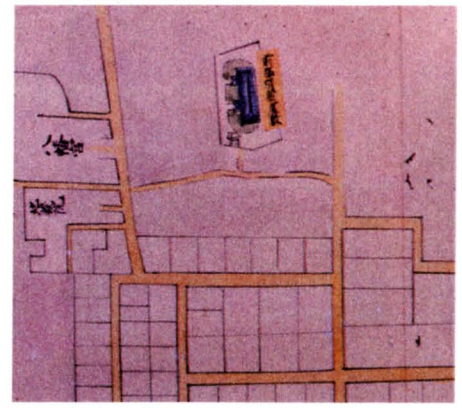
第15図　津山高校調査区と本調査区検出道路の位置関係

二ヶ所の遺跡をつなぐと左の図のように道路がつながっていることが分かる。
城下町が完成に向かう過程で右側の道路が廃止され、武家屋敷地の中に取り込まれたと考えられる。

5

小豆研

一、椿高下に安藤氏の太夫之幸の下屋敷あり此処に小豆研といふ化物あり夜更て通れハこじこしとあつきを研音の聞ゆといふ夫故小豆研といふ



煙硝蔵

煙硝というのは近世に用いられた黒色火薬のことで、硝石・木炭・硫黄を混合して作られ、通常は半地下式の煙硝蔵に保管されていた。森藩の時代には、この北小学校の場所に煙硝蔵があったが、『美作略史』によれば、この場所は人家に近く危険だとの判断から、元禄8年(1695)9月から10月にかけて、城下から遠く南に離れた佐良村に移転されたという。移された煙硝は約二〇万斤(約百二十トン)であった。

4

四十間蔵の前の茶立

一、むかしより此所にいろいろの事ある故諸人慎ミて深更にハ此道を過す夜半に通れはぼてぼてと茶を立る音の聞ゆるといふ当代に江嶋某と申足軽此所にて白き鳥毛槍のひとりあるくに逢たりと云又五十嵐氏と云ふ人あり夜更て通りけれは北御門の前と覚しきに葵の御紋の幕を打燭台を灯し上下に着したる者数十人威儀を正して列座したるを見て通る事能ハす西へ廻りて帰りけるもの物語りたり其外清水氏と云医座頭に逢たりと云怪異なる事数々なり

3

望月坂の槌(ツチ)

一、此所に屋敷あり森家の時代ハ節々不思議なる事多し近世に宝永六己巳(ママ)年望月氏籌英(ヒサチル)幼少の節此屋敷に大きなる榧(カヤ)の木ありこの下にて遊ハれしに上より手を出し髪の髻りより切て虚空へ上り申よし是世の人慥に知りたる事なり其後も槌のころひ申事度々にて見たるもの多し近きころにも地蔵院の小僧此坂にて槌に逢気絶致し申よし其外怪(ケウ)有なる事度々あり

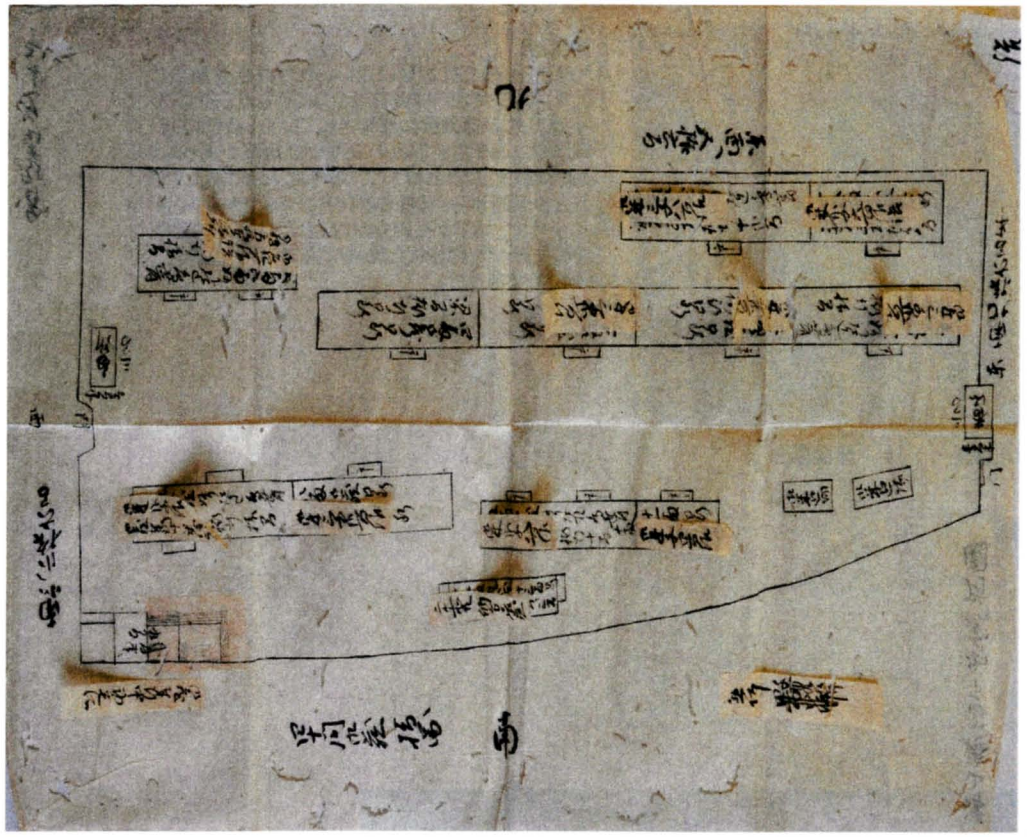
2

八子村入口の野襖(ノフスマ)

一、夜中過て通れは藪の内より壱尺斗の紙のよふなるもの出忽ち一間斗に広くなり人を包申よし是に逢たるものハかならす瘧(キヤク)を病申由又傍に辻井戸あり先年小チヤホト云ふ女此井へ身をなけ申候其外近き頃にも色々怪しき事多し

江戸時代の中頃に成立したと考えられる『山陽道美作記巻之八』には、「津山王代より化物の住所七不思議之事」という項目があって、津山とその近辺に棲む様々な妖怪や変化、あるいは不思議な出来事が記録されている。タイトルでは七不思議としているが、実際には多数の事例が載せられている。

さて、その中で津山の城下町に住む妖怪たちが紹介されていて、「樫原前の変化」「八子村入口の野襖」「望月坂の槌」「四十間蔵の前の茶立」「小豆研」「坂口の幽霊」「入道坂」などがある。これらは、総てが妖怪というわけではないが、江戸時代の津山の人々にとっては、恐ろしいながらも興味深い怪奇現象の話として、様々に噂されたと考えられる。

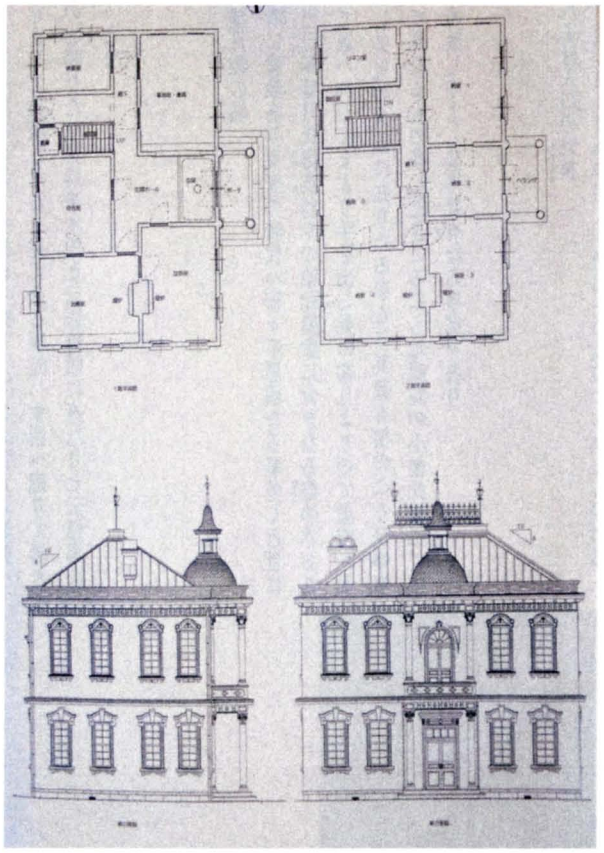


四十間蔵

四十間蔵は椿高下にあって、六棟の米倉が建ち並んでいたが、その中でも最大のものは長さが四十間に及んだので、蔵屋敷そのものが四十間蔵と称されていた。
建物は六棟であるが、内部の区画は十三区画に分かれていて、管理上は、戸口の数による一番蔵から十五番蔵まであった。「十五戸前」というのはこのことを指している。松平藩時代の記録では、全体で二万九千俵の米が収納されるものとされていた。

竹の馬場
藺田川沿いのみならず、古くは、城下町南部の吉井川の堤防にも竹藪があった。

正保津山城絵図
（内閣文庫蔵）



旧中島病院実測図（「田町武家屋敷実測調査」から）